

第四次元の男

海野十三

青空文庫

これからわたくしの述べようとする身の上話を、ばかばかしい
と思う人は、即座に、後を読むのをやめてもらいたい。そして、
この本の頁を、ぱらぱらとめくって、他の先生の傑作小説を読む
のがいいであろう。銀座の人ごみの中で、縮れ毛ちぢ毛の女の子にキッ
スされた話だの、たちまち長脇たがぎしを引っこぬいて十七人を叩き
斬った話だのと、有りそうでその実有りもしない話に、こりや本
当らしい話だと、うつつをぬかすような手合てあいに、これからわたく
しの述べようとする、無さそうでその実本当にある話を読んでも
らっても、とても真の味はわからないであろうから。（もつとひ
どい言葉でいいたいところだが、冒頭だから、敢て遠慮をしてお

く)。

さて、もうこの行のあたりを読んでくださる読者は、十中八九、真にわたくしの気持ちに理解のある粒よりの高級読者だけが残っておられることと思ひ、わたくしはそろそろ安心して本調子のお話をすすめようと思うが、しかしまだ幾分ゆだんは出来ないぞ。

それはさておき
閑話休題

——と、置いて、さてわたくしは、この一、二年こ

の方、ふしぎな自分自身について、はつきりと気がついた。それは、わたくしの身体が、ときどき、誰にも見えなくなるというめずらしい奇現象である。つまり、スーツと、かき消すように、わたくしの身体が見えなくなってしまうのである。

なんというばかばかしい話であろう——と、思う読者があるだ

ろう。そういう読者よ。これから後を読むのをおよしなさい。君はきつと胸が悪くなるであろう。しかもなお、ばかばかしさが千倍万倍に増長していくのだから。この辺で、読むのをよすのが、お身のためであろうぞ。

さて、残りの読者諸兄姉よ、卿等けいらは、よくぞこの行まで、平然とお残りくださった。読者中の読者とは、実に卿等のことを指しているであろう。わたくしは、永く永く卿等の芳名ほうめいを録して——とまで書いてきたとき「お世辞はもういい加減にして、先を語れ」という声あり。はい、承知しました。こういう良質の読者には、何をいわれても、わたくしは一向腹が立たない。

さて、十中十までのわが愛読者諸兄姉よ（だが、まだゆだんは

ならない)。

とにかく、わたくしは、この一、二年この方、ふしぎな自分自身に気がついた。それは、わたくしの身体が、奇妙にも、誰にも見えなくなることがあるのだ。

一体こういう奇現象は、なにもわたくし一個人にかぎる現象でもなく、方々にこれと同じ現象をお持ち合わせの方があるのではないかと思う。彼等は、わたくしに較くらべて、ずっと賢明ないしは内気であるため、その秘密について告白されないので、普通なみの人間のように振舞っていられるのではなからうか。実際は、そういう風に取り澄よましている方が、世間に浪も立たず、御自分自身も妖怪ようかいへんげ変化あつかいされず、まともなところから立派なお嫁さ

まないしはお婿さまが来ることが約束されているのを無駄にしな
いですむと考えておられる結果であろう。ところが、このわたく
しは、そういう賢明人種とはちがひ、至つて生来無慾恬淡^{てんたん}の方
であるからして、なにごとも構わずぶちまけて、一向に憚^{はばか}らない
次第である。

でも、他人さまのことは他人さまの御勝手ということにして置
いて、わたくしは自分のことを詳しく申し述べる所存であるが、
まずこのわたくしが、初めて自分自身の消身現象に気がついたと
きの、あの戦慄^{せんりつ}すべき思い出を語ろうと思う。

戦慄すべき思い出——などと書いたが、見掛^{みか}けは、それほど戦
慄すべき事件でもなかった。あれは一昨年の夏のことであったが、

わたくしは勤めから戻って、一日の汗を、アパートのどろくさい共同風呂の中に洗いおとし、せいせいとした気持になって糊のかたくついた浴衣を身体にひっかけ、宵よいの新宿街の雑ざつ鬧とうの中にさまよい出たのであった。どういうものか、人間というやつはすぐこうしたちぐはぐなことをやる。それはどうでもいいことだが、わたくしは、さんざん夜店をひやかし、あやしき横丁を残りなく廻りつくし、ニュース映画劇場を二つも見物し、拳あげく句の果は今は今ストックおん淋しきブラック・コーヒーを一杯とって、高速度カメラでとった映画の如く、いとも鄭重なるモーションでもって一口ずつ味わいくらべつつやつたもんだから、時計の針は十時を指していたが、外へ出てみると、あの雑鬧ちまたの巷ちまたが人っ子一人いない

というほどでもないが、形容詞としてはそれに近いさびれ方であつて、真の時刻は十二時をしたたか廻つていようように思われた。

（断つておくが、前の時計は、電気時計である。まさか十二時すぎまで、ブラック・コーヒーをのませる店があるものかという人には告げん、闇取引のコーヒー店あることを！ これを信じない人は、後段を読むこと無用である。なぜならば、そういう人にはこれから述べようとするわたくしの真実の実話などは、到底なんのこともだか信じられないであろう）

だんだんと、篩ふるいをかけてきた結果、いよいよ真相を告げておよろしい頃合となつたと思うが、わたくしは、人通りまばらなる舗道のうえを歩きだした。わたくしのアパートは、戸塚三丁目にあ

るので、新宿から歩きだすと、途中で戸山ツ原のさびしい地帯を横断して帰るのが一等捷徑ちかみちであつた。だからそのときも、従來の習慣に従つて、正にそうしたのであるが、その結果、遂に戦慄すべき発見に正面衝突をしなければならなくなつたのであつた。

さて、わたくしは、電灯を几帳面きちようめんに盡く消し去つて、おそろしく大きなボール紙の函が落ちているとしか見えない某百貨店の横をすりぬけ、ついで出来のわるい凸凹の長塀としか見えない小売店街のいびきの中をよたよたと通つて、ついに戸山ツ原の入口にと、さしかかつた。

深夜の戸山ツ原！

それは知る人ぞ知るで、まことに静かな地帯である。地帯一帯

を蔽う、くぬぎ林は、ハヤシの如くしずまりかえっているし、はき溜だめを置いてあるでなし、ドブ板があるでなし、リーヤ・カーが置きっ放しになっているではなし、ましてやネオンサインも看板もない。そこに在るものは、概して土で、その外、くぬぎの木と、背丈の短い雑草とキヤラメルキヤラメルの空函くわんぐらい、あとは紙類がごそごそ匍はつている程度である。実に一向開けない原っぱであるが、これが歌舞伎芝居なら、大ざつまを入れて、柝きの音ねとともに浅黄あさぎま幕くを切っておとし、本釣ほんづりの鐘かねをごーんときかせたいところであるが、生憎あいにくそんなものは用意がしてなくて、唯聞ただえるは、草の根にすだく虫の音ばかり、とたんに月は雲間を出でて、月光は水のように流れ、くぬぎ林はほのぼのと幹こを露呈ろうていしてわが眼底に

像を結んだ。わかりやすく言えば、月が出て、林が明るくなつただけのこと。

そのときわたくしは、無人の境だとばかり思っていたこの戸山ツ原に、人がいるのを知つて、びっくりした。それは、くぬぎ林の中から、急に人間が出て来たのである。人数は二人であつた。

一人は若い男で、他の一人は若い女であつた。

二人は、何か早口で喋りながら、こつちへやってきた。わたくしはそれを見て、少々癩しやくにさわつた。そういう気持は、誰にでも判るであろう。わたくしは、わざと意地いじわるく二人の邪魔になるように歩いていった。若き男女は、わたくしの悪意を間もなく見破つて、横にさけるであろうと、わたくしは予想していた。とこ

ろが、わたくしが近よつても、二人の男女は、一向にわたくしをさけようとはしないのであつた。これには、わたくしも腹を立てて二重に癪にさわつたことであつた。

そのままわたくしが前進すれば、必ず二人の男女にぶつかるしかない。相手は、あいかわらず一直線に近づいてくる。それを見て、わたくしは、こつちで道をさけようかと思つた。しかしわたくしが道をさけるいわれは一向にないことに気がついた。相手は二人でたのしんでいるのである。われは一人で一向楽しんでいる。しからは恵まれたる彼等は、恵まれざるわれのために道をゆるるぐらいのことはしてもよいではないか。

そう思つたわたくしは目をつぶらんばかりにして前進した。

(あぶない！)

どすると、わたしの身体は、若き男の方にぶつかった。

「あいたツ」

と、その若き男は叫んだ。そしてよろよろとうしろによるめいた。(倒れるか、気の毒に……) と思ったのは、わたくしの思いあやまりで、かの若き男は、ぐつと一足をついて体勢をたてなおした。

「おや、へんだな。——そして僕は伯父にいったんだ。僕はこれがうまくいかなければ……」

と、早口で喋るのは、その若き男であった。

「あら、どうしたの、今？ あんた倒れそうになったじゃないの」

と、若き女がいった。

「ああ、なんだか身体が、あんな風になつちやつたんだよ。もういたくも何ともないよ。——それで僕は伯父に……」

「だけれど、へんね。まるで、目まいでも起こしたようだったわね」

「なあに大したことはないよ。僕、このごろすこし神経衰弱らしいのでね」

そういいながら、二人の若き男女は、ぼうぜん 呆然たるわたくしをのこして向うへいつてしまった。

わたくしは草原へすわりこんだまま、しばし二人の後姿を見送っていた。

(なんとという暢気のんきというか、鈍感というか、あきれた二人連れだろ。自分たちの話に夢中になって、わたくしの突き当あつたことに気がつかないのだ)

だが、待てよ、どうも腑ふにおちぬことがある。まさか、二人の目の前にわたくしが立っているのであるからして、それに気がつかぬというのはおかしい。どうもおかしい。

わたくしは、とてもへんな気持で、またそのまま、くぬぎ林の中を歩いていった。月光は、梢こずえの間から草の上にもれて、ちらりちらりとひかっていた。

すると、わたくしは、また新しい一組の若き男女が、林の奥から、しずかな歩調でもって出てくるのを見つけた。

(なんと、二人連れの多い夜だろう)

と、わたくしは、最初憂鬱ゆううつになり、ついで憤慨した。

(ついでに、こいつ等にも、ぶつかってくれよう!)

わたくしの邪心は、勃々ぼつぼつとしておさえがたく、ついにまたし

ても、新来の男女が、ぴったりとより添っているあたりを目がけて、どすんと突き当った。その効果は、どうであつたか。

その結果は、びっくりしたのは、わたくしの方であつた。

なぜなれば、かの兩人は、

「あら、およしなさいよ、松島さん」

「あれッ、ひどいよ、君ちゃん。君の方が、ぶつかっておいて：

…」

と、互いに相手がぶつかつたと信じ合い、とうの昔に、兩人の間をすりぬけて、そのうしろに立っているわたくしの存在には、一向に気がつかない様子だつた。

これには、わたくしも、

(おやツ、これはへんだぞ！)

と、思わずつぶやいたことである。

「あれえ、誰かいるわよ」

「さあ、誰もいやしないよ」

「あら、誰もいないのね。いま、へんだぞとかなんとかいったように思つたけれど……」

兩人は、わたくしの方に顔を向けたまま、そんな風に話しあつ

た。しかもわたくしのいることについて、全然気がつかないようであった。

そこでわたくしは、襟えりすじ筋が、ぞーツと寒くなったのを、今でもよく覚えていてる。

(へんだ。前の二人も、今の兩人も、どうやらわたくしのいるのに気がつかないようだ。そんなことがあつていいかしら)

わたくしは、だんだん気がへんになってきた。胸はどきどきとおどつてきた。気が変になりそうになった。

わるいと思い、おそろしいとも思ったけれど、わたくしは、つづいて第三の一組に対しても、ためしをやってみた。その結果も、また実になしむべきものであつた。誰も、わたくしの存在に気

がつかないのである。わたくしの身体が、彼等に見えないのである。こんな悲しむべき、かつ又恐ろしきことが、またとあるであらうか。

それからわたくしは、戸山ツ原の草のうえに、一時間あまりも転がって、ひとりで煩悶はんもんをつづけた。そのうちに、月が雲の中に入つて、あたりも暗くなつたので、わたくしは立ちあがつて、自分のアパートへ帰つてきたのである。そして鍵をまわして、自室に入り、寢床の中にもぐりこんだ。そして朝まで睡ねむつてしまつた。

その翌朝、元来暢気のんきに生れついたわたくしは、昨夜の恐ろしかりしことどもをついわすれ、起きるとそのまま歯みがき道具と手

拭とをさげて、洗面所へいった。

「やあ、今ごろ起きたのか。ばかにゆつくりだね」

と、わたくしは声をかけられた。

わたくしは、その途端に、はつと思つた。声をかけてくれたのは、同じアパートの住人にして草分くさわけをもつて聞える藤田という
大道人相見の先生だつた。

「……」

「なんだい、その顔は。鼠が鏡餅の下敷きになつたような当惑顔を
をしているじゃないか」

藤田師は、例によつて辛しんちつ辣なことを、なげつける。わたく

しは、そのとき、咽喉のところまで出てきたことば——藤田さん、

わたくしが見えるかね、わたくしの身体が——と聞きたいのを懸命に我慢した。そしてわたくしは、自分の背後をふりかえつてみたのであった。それはもしや藤田師が、わたくしの後に立っている他の者に対して、話しかけたのではないかを知るためだった。

その結果、わたくしは、初めて、大安心をすることができた。

わたくしの後には誰もいなかった。廊下は、奥の方まで素通しすとおで、猫一匹、そこにはいなかった。

「やあ、藤田さん。ゆうべは、だいぶもう儲けたらしく、機嫌がいね。はははは」

と、わたくしは、初めて笑いごえを立てた。

「うふ、ゆうべだけじゃないよ。このごろは、亡もうじや者ども、一般

に金まわりがよいと見えて、見料の外にチップを置いていくよ。
呆あきれた時勢だな。はッはッはッはッ」

藤田師の笑い声は、わたくしにとって、千両万両の値打があつた。わたくしの身体は、たしかに見えるのである。その証明が、この藤田師によつて、りっぱに立ったのである。わたくしは、天にもものぼらんばかりの巨大なる悦よろこびを感じた次第であつた。

この悦び、この安心！

だが、わたくしにとつて、解けぬ謎は、あの夜の戸山ツ原の怪事件であつた。なぜ、あの夜に限り、わたくしの姿が、あの人々には見えなかつたのであろう。

わたくしは、そのことを、仲のいいわたくしの友達で、白石君

というのに話をした。但し、わたくし自身の身の上話をしないで、第三者の話のような角度でもって語つたのだつた。

すると、その白石君は、ふふんと鼻で笑い、

「それは、分つているさ、別にその人（実はわたくしのこと）の身体が見えなかつたわけじゃないのさ」

「えっ？」

「つまり、あんなところで密会している若い男女にとって、向うから突き当つてくるその人は、不気味な恐ろしい人物と見えたので、そこで触らぬ神に崇たたりなしのたとえのとおりで、見て見ぬふりをしたというわけだ。つまり、その人を怒らせて、物事をあらだてては、二人の大損だからね」

「ふーん、なるほど。そうだったか。はははは」

「なにがおかしいんだ。へんな男だ」

白石君は怪訝けげんな顔をして、わたくしを見つめたが、わたくしはうれしくてたまらなかつた。

ところが、そのよろこびは、ものの五日とつづかなかつた。或る夜、また新宿からの帰途、例の戸山ツ原にさしかかつたとき、全く同じような目にあつた。つまり、わたくしの姿が、またもや全然認められないのであつた。

恐しい病気の再発に似たわたくしの悲しみだつた。白石君の言は、たった三日たらず、わたくしをよろこばせてくれたに過ぎないのであつた。わたくしは、再び暗黒の無限むげんじごく地獄へ、真逆まっさかさま

に墜落していく。一体どうしたことであろうか。人間の身体が、全然見えなくなるなんて……。

相手の錯覚さっかくではないようだ。相手を幾人かえても、見えないときは矢張り見えないのであった。わたくしは恐怖に戦慄しながらも、なぜそうなるのであるかと、ひそかに好奇心を湧きあがらせた。だが、その答は、にわかには出て来なかった。

わたくしは、そのような呪わしい身のろの上を、余人に語る気はなかった。もしもそんなことをすれば、わたくしは忽ち興行師に追いかけられ、さあ見ていらっしやい、お代は見てのお帰り——の見世物になってしまうことであろう。わたくしは、あくまで普通の人間でいたかった。

さりながら、いつまでたつても未解決のまままで、じつとしているわけにもいかないので、わたくしは、藤田師を煩わづらわして、わたくしの人相を見てもらった。もしや何か異様ある人相が現われていないかしらと、思ったのである。

すると、藤田師は御自分の皺しわが、隅田川のように大きく見える。天眼鏡をもつて、わたくしの顔を穴のあくほど見ていたが、やがて彼は、俄かに愕おどろきの色をあらわし、おそろしそうに身を引いた。そして改まった口調でいいだしたことである。

「ふうむ、君の人相を仔細に見たのは今が初めてであるが、君の人相は天下の奇相きせうであるぞ。愕おどろいたもんだ」

「なんだね、その奇相というのは……」

わたくしは、いささか気味がわるくなって、問いかえした。すると藤田師は、平生のぐうたら態度に似合わず、きちんと膝に手を置いて、

「むかしわれ等の先輩の一人は、草履取ぞうりとり木下藤吉郎の人相を占つて、此この者天下を取ると出たのに愕おどろき、占いの術のインチキなるに呆あきれ、その場で筮ぜいちく竹をへし折り算木さんぎを河中に捨て、廃業を宣言したそうであるが、その木下藤吉郎は後に豊太閤となった。だが、わしは今、この天眼鏡と人相秘書とを屑屋に売り払おうと思ふ」

「おい、脅おどかしっこなしだ。なに事だね、一体それは……」
「つまり君の人相だ。実に千万億人に一人有るか無しの奇相であ

る。それによると、君はわれわれが今見ている現実世界の住人ではない」

「えっ、なんだって、少しもわけがわからない」

「わからないことはない。君は、ちよううちゆう超宇宙人種だ」

「超宇宙人種？　いよいよわからなくなつた。超宇宙人種かもしれないが、現にこうしてりっぱな日本人として、君の目の前にいる」

と、威張つてみたものの、そのときわたくしは、はつと胸をつかれたように思つたのである。それは例のことを思い出したからであつた。戸山ツ原の夜の散歩人に、わたくしの姿が見えなかつたらしいあの夜の記憶が、戦慄とともに甦よみがえつてきたのである。

藤田師は、それに構わず、先を喋る^{しゃべ}る。

「これを分り易くいえば、わが眼に今見えている君は、君の実体を或るところから、すぱりと斬ったその切り口に過ぎない。たとえば、ここに一本の大根がある。その大根を、胴中からすぱりと切り、その楕円形^{だえんけい}の切り口の面だけを見ていると同じことだ。つまり、ほほう、これは真白な、じくじく水の湧いた楕円形の面だ」と思う。しかるに、その白面は、大根の一つの切り口に過ぎないのである。面だけのものではない。だから、今日の前に見える君は、君の実体の一つの切り口に過ぎないのだ。君の実体は、かの白い切り口における大根そのものの如く、われわれの想像を超越した何者かである」

「どうもよくわからん」

「理窟りくつだけなら、よくわかっていないか。では、こういうことを考えて見たまえ。われわれの世界では、物は皆、縦と横と高さを持つ。つまり三次元だ」

「うん、三次元の世界だ」

「しかるに今、二次元の世界があつたと仮定しろ。それは縦と横とがあるきりで、高さが無い。まるで静かな水面のような世界だ。平面の世界だ」

「うん、二次元の世界か」

「今、水面へ、さっきの話の大根をしずかに漬けていったとしよう。はじめは、大根の尻ツ尾が水面に触れる。そのとき二次元の

世界では、大根は一つの小さな点だとしか見ええない」

「ふふん」

「ところが、大根を、ずんずん水の中におろしていくと、水面に切られている部分は、だんだん大きい白円に拡がっていく。二次元の世界では、点がだんだん大きい白円に生長していくのが見えるのだ。そしてついに、大根の葉っぱのところは水面で切られると、今まで白円と思っていたものが、急に一変して、多数の青い帯が散乱しているように見える。その青い帯が、たえず動き、そして形が変るのだ。そして大根の葉っぱの一番上のところが、水面をとおりすぎて下におちると、とたんに二次元の世界には、なんにもなくなる」

「ふふん、奇妙なことだ」

「はじめ白い点から始まり、やがて大きい白い円盤となり、やがてそれが青い帯の散乱となり、ついにぱつと消えてしまうまで——二次元の世界の生物には、それは一種の幽霊的現象として映ずるが、われわれ三次元の世界の者をして云わしむれば、それは要するに、一本の大根が、静かなる水面に交わり、しずかに下に下っていったに過ぎないのだ。だが二次元の世界の生物には、われわれが認識しているような大根の形をついに想像出来ないのだ。

二次元の者には、三次元の物を認識する能力がないのだ」

「ふーん、君はなかなか科学者だ」

「そうだ、人相見の術は、科学なのである。そこで君のことに帰

るが、わしの観相によると、君は三次元の生物ではなく、四次元の生物であると出ているのだ。そんなばかばかしいことがあつてたまるものかと思うが、そう出ているんだから、よういわん。わしは、きょうかぎり、人相見をよそうと思う。インチキ極まる術だ」

わたくしは、専ら^{もっぱ}、溜息^{ためいき}の連発をやらかしたただけであつた。

藤田師の言は、切々として、わたくしの胸をうった。といつて、ここで木下藤吉郎のように、（いや、わたくしは今に大成功をする、お前さんの占いは正しいのだ）と大見得^{おおみえ}を切る元気もなかつた。それよりは、なぜわたくし自身が、そうした呪^{のろ}わしい人間——いや生物に生れついたかという歎きであつた。と同時に、果し

て四次元の生物ならば、わたくしの実体は如何なる形のものであるか、ということに対する好奇心に、ゆすぶられた次第であった。

爾来、私は、隠者のような生活をしている。今も私の身体は、ときどき人間たちの眼に見えなくなるようである。不意に人に突き当たられて吃びっくり驚まますることが間々あり、そのたびに、また始まつたなと思う。

近頃しらべてみたところ、わたくしの父母は未み詳しょうである。つまり、拾われた子であることがわかった。だから、人間の母胎ぼたいから生れてきたかどうか、その辺のことはすこぶる疑わしいこととなった。だが誰でも、自分が人間の母胎から生れてきたことをはつきり憶えている者はないであろう。この母の胎内から生れたの

だというのは、単に誤伝に過ぎない。故に、実際は、わたくしと同様四次元の生物でありながら、うっかりしていて、それと知らないで過ぎている人が案外少くないのではないかと思う。

そういう人は、よく注意をしていなければならぬ。往来やその他で、人にどすんと突き当られたときは、一応この疑いを持って（自分の姿が、今、相手に見えなかったのではないか、自分は四次元の生物の切断面（？）ではないか）と、反省してみる要がある。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第6巻 太平洋魔城」三一書房

1989（平成元）年9月15日第1版第1刷発行

初出：「ユーモアクラブ」

1940（昭和15）年1月

入力：tatsuki

校正：土屋隆

2007年7月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

第四次元の男

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>